HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	新型コロナウイルス断想
著者	上野，誠治; UENO, Seiji
引用	年報新人文学(17): 2-7
発行日	2020-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

【巻頭言】

新型コロナウイルス断想

上野　誠治

二〇二〇（令和二）年は、二月のさっぽろ雪まつり前後から、新型コロナウイルスが世間の口の端に上るようになり、その後、北海道独自の緊急事態宣言、不要不急の外出自粛などで、私達の生活は一変した。中でも、外出時や人前でのマスク着用が必須となり、そのせいで一時期店頭から「入荷未定」の貼り紙とともにマスクが消える事態となったことはまだ記憶に新しい。道行くほとんどの人々がマスクをしているという異様な光景が当たり前になった。初夏を迎える頃から少しずつコロナ禍も落ち着きを取り戻したかに見えたが、秋口から再び感染が拡大し、マスクに加えて、至る所で消毒液や検温器が設置されているのを見かけるようになり現在に至っている。

さて、新型コロナウイルス感染症は、私達にクラスター（感染者集団）、ロックダウン（都市封鎖）、パンデミック（世界的大流行）などの、関連する多くのカタカナ言葉を提供した。必ずしも新語というわけではないが、二〇二〇年に新たに脚光を浴びることになったものである。米国の『メリアム・ウェ

ブスター辞典』は「今年の言葉」に pandemic（パンデミック）を、英国の『コリンズ英語辞典』は lockdown（ロックダウン）をそれぞれ選んでいる。

歴史的なパンデミックというと、十四世紀ヨーロッパのペスト（黒死病 Black Death）、十九世紀のコレラ、一九一八〜一九年のスペインかぜのほか、記憶に新しいところでは、二〇〇九年四月に発生した「新型インフルエンザ」（ブタインフルエンザ）がある。二〇〇三年に流行した新型肺炎 SARS（サーズ、重症急性呼吸器症候群）も衝撃的だったが、WHO（世界保健機関）が定める定義では、感染規模の観点からパンデミックには該当しないらしい。いずれにしても、人類は数多くの犠牲者を出しながらも度重なる感染症の試練を乗り越え、生き延びてきた。今の我々は、その生き延びることができた幸運な祖先の子孫ということになる。

図1　マスクと防護服を身にまとった異様な姿のペスト医師

とりわけ十四世紀に猛威を振るったペストでは、ヨーロッパの人口の三分の一に当たる二千万から三千万人が死亡したと言われる。当時の英国では、一〇六六年のノルマン征服（Norman Conquest）以降、ノルマン人が支配階級・上流階級を形成したことにより、彼らの故郷（現在のフランス北西部のノルマンディー地方）で話されていたノルマン・フランス語（Norman French）が約三〇〇年間に

亘り英語に代わって公用語の地位を占めていた。一方、英語は下層階級の言語に落ちぶれていた。そのような状況下で大流行したペストにより、下層階級を中心とした人手や労働力が不足する事態となったが、それが却って彼らの希少価値を生み、結果として農民や労働者は高い労賃を得ることになり、社会的な地位もやがて向上していくことになる。それとともに彼らが話す英語が、英国社会において次第にその地位を上昇させながら、十四世紀後半には公用語の地位を回復していく。こうして英語という言語もまた、社会情勢の幾多の変遷を経ながら、何とか生き延びてきたのである。

さて、前述のカタカナ言葉がメディアに頻出するようになった当初は、耳慣れない用語に戸惑う人も多く、時の防衛大臣が「日本語で言えることをわざわざカタカナで言う必要があるのか」と持論を展開する一幕もあった。その話題に関連して、十六世紀に始まる英国ルネサンス期に、ラテン語やギリシア語の借用語を大量に受容した人文主義から、それらを衒学的なインク壺語（inkhorn terms）として排斥する英語純正主義に至る一連の動向が想起される。また、それらは難解な語が多かったため、その語釈を解説する必要から、その後の辞書作りへと連なっていくが、現代は、インターネットで検索すれば立ち所にある程度のことは調べがつく（安易ではあるが）便利な時代である。

pandemicという語は、『メリアム・ウェブスター辞典』によれば、形容詞としての初出が一六六六年、名詞としての初出は一八三二年（『オックスフォード英語辞典』では一八五三年）である。「世界的大流行」という名詞的な用法は、形容詞からの（品詞）転換（conversion）と言えよう。同じ綴りであっても別の品詞として用いることもできる英語のしなやかさを示す好例の一つである。また、lockdownも、本来はlock down（「閉じ込める、封鎖する」の意）という句動詞（phrasal verb）が（品詞）転換によっ

て名詞化したもので、同辞典によれば「囚人を監房内に監禁すること」が一九七三年初出時の意味であるが、それが囚人に限らず一般化されて「危険を理由に、建物や地域に入ったり、出たり、その中を移動したりが自由にできない緊急の状況」(『ケンブリッジ英語辞典』)を表すようになったと考えられる。我々がよく目にする「都市封鎖」は「建物や地域」が都市の場合に限った意味であろう。いったん意味の一般化を引き起こしたものが、再び特殊化している点が興味深い。

ちなみに、コロナ禍によって、ほとんどの学会や研究会が対面で開催出来なくなったためによく見かけるようになった語のひとつに webinar(「オンラインセミナー」の意)があるが、これは web(「情報通信網、ウェブ」の意)と seminar の一部 -inar が混成(blending)によって作られたかばん語(portmanteau word)である(『オックスフォード英語辞典』による初出は一九九七年)。また、新型コロナウイルス感染症の正式名称である COVID-19 とは *coronavirus disease* 2019(二〇一九年に発生した新型コロナウイルス感染症)の頭字語(acronym)である。

以上のように、英語史に出てくる黒死病やインク壺語、形態論や意味論に出てくる句動詞、(品詞)転換、混成、頭字語、意味の一般化と特殊化など、普段担当している講義と関連する話題も多く、対面の授業であれば、現下のコロナ禍と結びつけて時宜に即した話をすることもできただろうが、オンデマンド授業ではなかなかそうもいかず歯がゆい思いを強いられた。

まさに、新型コロナウイルスに始まり、新型コロナウイルスに終わった二〇二〇年であったが、残念なことに未だに終息の目処が立たないまま新年を迎えることになってしまった。そこで思い出したのが、昔テレビで見た映画『キュリー夫人』(原題 *Madame Curie*、一九四三年アメリカ、主演グリア・ガース

ン）の一場面である。キュリー夫妻が雨漏りのするみすぼらしい掘っ立て小屋の中で日夜、未知の元素ラジウムを単離すべく実験・作業をしている。夫妻は、もらい受けた何トンものウラン鉱石の滓を大鍋で煮沸するなどして得られたバリウムとラジウムの混合物から、分別結晶化させる手順を繰り返すことによってラジウムを分離するという作業に疲労困憊していたが、大晦日の夜に、恩師のペロー教授が陣中見舞いに訪れる。帰り際に教授はRing out the old, ring in the newと高らかにある詩の一節を朗詠する。それは、英国ヴィクトリア朝時代の桂冠詩人アルフレッド・テニスン（Alfred Tennyson）が友人の死を悼んで書いた長詩『イン・メモリアム』(*In Memoriam A. H. H.*）にある詩篇「鳴り響け、荒ぶる鐘よ」(*Ring out, Wild bells*）の一節（第二スタンザ）である。詩人は、教会の除夜の鐘を聴きながらそれを作ったという。

Ring out the old, ring in the new,
Ring, happy bells, across the snow:
The year is going, let him go;
Ring out the false, ring in the true.

鐘を鳴らし、古きものを送り出し、迎え入れよ、新しきものを／鳴り響け、幸せの鐘よ、雪面を越えて／この一年が過ぎて行く、去らせるがいい／鐘を鳴らし、虚偽を送り出し、迎え入れよ、真実を

映画には登場しないが、続く第七スタンザには、

Ring out old shapes of foul disease,
Ring out the narrowing lust of gold;
Ring out the thousand wars of old,
Ring in the thousand years of peace.

鐘を鳴らし送り出せ、古き悪疾の幻影を／心を
偏狭にする黄金への強欲を／古の数多の戦を／
鐘を鳴らし、迎え入れよ、千年の平和を

とあり、一行目の foul disease（悪疾）から新型コロナウイルス感染症が引き起こした現下の社会情勢を連想するのは私だけではあるまい。

行く年来る年を教会の鐘に託してテニスンが詠ったように、新年が希望に溢れる一年となることを祈るばかりである。

（うえの　せいじ・北海学園大学大学院文学研究科教授）

図 2 教会の鐘 ©Albrecht Fietz